

# 人間は「頭の中」で理解するわけではない

村 上 直 樹

**要旨：**常識的には、人間は、物事を「頭の中」で理解していると考えられている。例えば、人間は、他人の言葉を、耳や目といった感覚器官を使って体の中に取り入れ、それを「頭の中」で理解していると考えられている。しかし、この描像は正しくない。他人の言葉は、「頭の中」で理解されているわけではない。そもそも他人の言葉そのものは、「頭の中」には入ってこない。では、他人の言葉は、どのようにして理解されているのだろうか。人間が、他人の言葉を理解するということはどのようなことなのだろうか。本稿の目的は、まずこの問いに答えることである。また、人間が理解しているのは、他人の言葉だけではない。人間は、言葉として表明されない他人の気持ちや意向、ひいては世界における様々な物、事象、現象をも理解している。そして、それらも人間の「頭の中」で理解されているわけではない。では、それらは、どのようにして理解されているのだろうか。こうした問いに答えることも本稿の目的である。

## 1. 「言葉のキャッチボール」図式から抜け出る

人間は、言葉のキャッチボールを行う動物であるとされている。言葉というボールを投げたり、キャッチしたりして、互いに意思の疎通をはかっているとされている。しかし、この「言葉のキャッチボール」図式は、比喩にすぎない。実際には、言葉のキャッチボールなど行われていない。

現代言語学の基礎を作ったと言われるフェルディナン・ド・ソシュールの『一般言語学講義』（一九一六年）第3章の中には、人間による言葉のキャッチボールを描いたように思われる図が記載されている（Saussure1971：27）。この図には、向かい合った二人の男、AとBが描かれており、Aの口から矢印の線がBの耳に向かって引かれている。その矢印の線は、Bの頭の中に入り、さらに頭から口に向かって引かれている。そして、Bの口からも矢印の線がAの耳に向かって引かれている。その矢印の線は、Aの頭の中に入り、さらに頭から口に向かって引かれている。仮に、この二人の間を行ったり来たりしている矢印の線が言葉であるとするならば、この図は言葉のキャッチボールのありようを明解に示した図であるということになるだろう。

Aが発した言葉をBが耳を介してキャッチし、頭の中で理解し、次にBが自分が考えたことを言葉にして、Aの頭の中に送り込むという図である。そして、こうした言葉のキャッチボールが行われていることを疑う人は、ほとんどいないのではないだろうか。しかし、そうした言葉のキャッチボールなど行われていないのである。

私たちは、こうした「言葉のキャッチボール」図式から抜け出なければならない。なぜか。端的に言えば、他人が発した言葉そのものは、自分の頭の中に入ってこないからである。

## 2. 言葉は「頭の中」には入ってこない

今、あなたの目の前で、友人が昨晩行った音楽ライブの素晴らしさを語り続けているとしよう。その時、「今までにないセットリストでさ」とか「ダンスもキレッキレだったよ」といった友人の言葉は、あなたの「頭の中」に入ってくるだろうか。

「頭の中」をあなたの内言が生じる場所だとしよう<sup>(1)</sup>。友人の話を聞きながら、あなたは様々な内言をつぶやいているだろう。その内言が生じている場所に、友人の声が、友人の言葉が入ってくるだろうか。入ってこないだろう。入ってくるとしたら、うるさくて仕方がないだろう。自分の中で他人の声がするという事だから。

では、「頭の中」を脳の中だとしたら、どうだろうか。友人の言葉は、あなたの「頭の中」＝脳の中に入ってくるだろうか。ちなみに、脳中心主義の人間機械論の源流に位置するド・ラ・メトリの著書『人間機械論』（一七四七年）の中には、次のような文がある。「言葉は一人の者の口から、他の者の耳を通して、脳に達する。」（de la Mettrie 1747 = 1932 : 65）この文が正しければ、友人の言葉はあなたの脳の中に入ってくることになる。しかし、言葉そのものは、脳の中には入らない。耳は、言葉そのものを受け入れるわけではない。耳が受け入れるのは、空気の振動である。言葉そのものが、耳を通して脳の中に入ってくることはない。

あなたの目の前で友人が言葉を発する度に、空気の振動が生じる。そして、空気の振動は、次のような過程を経て、脳に伝えられていくという。まず、空気の振動は、外耳道の端にある鼓膜に当たり、それを振動させる。次に、この鼓膜の振動が、中耳にある三つの耳小骨（槌骨、砧骨、鐙骨）によって、前底窓と呼ばれる膜に伝えられ、この前底窓をたたく連続的な圧力刺激が蝸牛の中のリンパ液を動かす。リンパ液の振動は、基底膜を振動させ、基底膜の上の有毛細胞＝受容細胞をそよがせる。有毛細胞のそよぎの結果、電気パルスという形で情報が形成され、それが、第一次感覚ニューロンであるラセン神経節ニューロンを介して脳に入り、蝸牛神経核で第二次感覚ニューロンに乗り換え、さらに内側膝状体の中継ニューロンを通して大脳皮質側頭葉の上面にある第一次聴覚領に入る（山本 1996 : 90,138-139；浜口 1990 : 135）。

夢中で話している友人が発生させた空気の振動は、以上のような過程を経て、あなたの脳に伝えられていく<sup>(2)</sup>。しかし、伝えられていくのはあくまでも空気の振動である。言葉そのものではない。「今までにないセットリストでさ」といった言葉そのものが鼓膜を振動させているわけではない。

では、言葉は、どこに伝えられているのか。言葉は、どこにあるのか。

言葉とは、人間の体という物が立てている音である。口もとあたりが立てている音である。口もとあたりから聞こえる音と言った方がいいかもしれない。そして、それは、どこにも伝えられない。友人の口もとあたりから聞こえてくる言葉が、あなたの体の中に入ってくるとしたら、「今までにないセットリストでさ」といった言葉があなたの体に向けて、どんどん迫ってくるはずだけれども、そんなことはない。友人の口もとあたりに生じて、すぐに聞こえなくなるだけである。

遠くの方で、近鉄電車の走っている音が聞こえる。でも、その音がどんどん自分の方に迫ってくるということはない。しまいには、自分の体の中で電車の走行音がするという事ではない。走行音は、遠くの方に聞こえて、すぐに、あるいはやがて、消えるだけである。それと同じである。他人の言葉は、外で生じて、外で消えるだけである。

音を二つに区別しよう。一つは、科学が扱うことのできる音、もう一つは、通常の意味での音である。三省堂の『物理小事典』の音の項目には、次のような記載がある。「音 人間の耳に聴覚を起こさせる振動。」この振動としての音は、耳を経由して脳に伝えられていく。しかし、通常の意味での音は、外で生起して消えていくだけである。この通常の意味での音に関して、物理学者の中込照明は次のようなことを書いている。「この色や音とはいったい何であろうか。物理学者としてはまったくわからない。老婆心ながら断っておくが、ここでいっているのは光子や空気の振動のことではない。意識素材としての色と音である。」(中込 2000: 23-24)

物理学者が「まったくわからない」という通常の意味での音——「意識素材」という言い方については、ここではスルーすることにする——は、脳の中には入ってこない。通常の意味での音である話し言葉も脳の中には入ってこない。だから、脳の中という「頭の中」で理解されることもない。「言葉のキャッチボール」図式は正しくない。

実を言えば、ソシュールの『一般言語学講義』の中の図は、「言葉のキャッチボール」を图示したものではない。「仮にこの二人の間を行ったり来たりしている矢印の線が言葉であるとするならば、この図は言葉のキャッチボールのありようを明解に示した図であるということになるだろう」と私は書いた。しかし、ソシュールによると、行ったり来たりしている矢印の線は、とりわけ口から耳に向かって伝わっていく矢印の線は、音波であり、その過程は「純粋に物理的な過程」(Saussure 1971: 28)である。『一般言語学講義』も言葉そのものが脳と脳の間を行ったり来たりしているとは言っていないのである。

ただし、“私—世界、一体説では、他人の言葉が外に聞こえることと他人の発話が引き起こした空気の振動によって鼓膜から第一次聴覚領、言語野に至る経路で物理化学的出来事が生起することは一体である。一体であるから、鼓膜の振動や有毛細胞のそよぎや第一次聴覚領の活動が生起しなければ、他人の言葉は聞こえない。他人の言葉が外に聞こえるには、空気の振動が脳に伝えられることが不可欠である。ただし、とは言っても、言葉そのものは、何度も言うように、脳の中には入ってこない。他人の言葉は外で生じて、外で消えるだけである。

では、言葉は、どこで理解されているのだろうか。言葉が「頭の中」——内言が生じる場所や脳の中——に入ってこないのだとすると、一体どこで理解されているのだろうか。どのように理解されているのだろうか。

### 3. 言葉が理解されるということ

職場の同僚が「ちょっと時間ある？」と話しかけてきたとする。この「ちょっと時間ある？」は理解されるだろうか。通常は、理解されるだろう。生後三ヶ月の赤ん坊に「ちょっと時間ある？」と話しかけても理解されないだろうが、職場でのやりとりにおいては、当然理解されるだろう。では、この「ちょっと時間ある？」が理解されるということは、どのようなことだろうか。

端的に言ってしまうと、「ちょっと時間ある？」という言葉が一定の意味を持って聴覚的に現われるということである。一般的に言えば、話し言葉が一定の意味を持って現われるということが、話し言葉が理解されるということである。話し言葉が理解されるにあたって、聞き手の側はとりたてて「理解する」という作用を及ぼす必要はない。話し手の口もとあたりに生じている言葉に、「理解する」という作用を及ぼす必要はない。

言葉、例えば「ちょっと時間ある？」は、すでに意味を持っているわけだから、「理解する」必要はなく、ただ「大丈夫だよ」と答えたり、困った表情をすればいいだけである。それは、小さなプラスチックの容器が「目薬の容器」という意味を持ってそこにある場合、別に「あ、目薬の容器だ」と理解する必要はなく、ただ手に取って目にさせばいいのと同じである。人間の言葉の理解は、言葉が世界の側で意味を持って現われることにおいて実現している。

“私＝身体、を中心とする“私＝世界、という物の世界において、あらゆる物はそれ自体で意味を持っている。それと同じように、“私＝世界、において生じる音も最初からそれ自体で意味を持っている。ハイデガーが使った例を拝借すると、“私＝世界、において聞こえるのは、「決してただの雑音や複合音ではなくて、きしむ荷車やオートバイである。聞こえてくるのは、行進中の縦隊や、北風や、幹をたたきつつきや、ぱちぱちはぜる火である」（Heidegger 1927 = 1994 : 350）。音である話し言葉も同じである。話し言葉も最初から意味を持って聞こえている。だから、聞き手は、「理解する」といった作用を及ぼすことなく、話し言葉を理解している。

ただし、聞き手の目の前で発せられるすべての言葉が意味を持って聞こえるわけではない。つまり、すべての言葉が理解されるわけではない。職場の同僚が「らゅそ」と言ってきたとする。当然、「らゅそ」は理解されないだろう。あるいは、*La réalité est abordée avec les appareils de la jouissance.*と言ってきたとする。これも理解されないだろう。「波動関数の収縮をもたらすのはデコヒーレンスである」もおそらく理解されないだろう。

聞き手の体を“私＝身体、とする“私＝世界、において、意味を持って現われる言葉は限定されている。“私＝世界、は意味の世界として発達していく。その発達の過程において、意味を持つようになった言葉だけが、他人によって発せられた際に意味を持って現われるのである。では、言葉が意味を持って現われるとは、どのようなことだろうか。

#### 4. 言葉が意味を持つということ

言葉が意味を持って知覚的に現われるということは、どのようなことか。これは、本当に大きな問題である。きちんと答えるには、それこそ一から長々と説明を続けていかなければならない。しかし、本稿では、私たちの（“私＝世界、一体説の）意味論、言語論を全面的に展開する余裕はない。ここでは、ごくごく簡単な説明にとどめることにしたい。

いきなり本題に入ろう。先に例として出した「ちょっと時間ある？」が意味を持って知覚的に現われるということは、どのようなことだろうか。それは、「ちょっと時間ある？」が他人とまとまった話をしたい状況で使用される言葉として現われるということである。同じように、例えば「世間知らず」が意味を持って知覚的に現われるということは、「世間知らず」が社会のルールにうとい人をたしなめるような状況で使用される言葉として現われるということである。

「言語ゲーム」という用語で知られるウィットゲンシュタインは、「哲学的文法」の中で、文や語の意味がわかるということは、その文や語によって指示される意味を把握できるということではなく、その文や語が「いかに使われるかを知っている」（Wittgenstein 1934 = 1975 : 52）ということであると指摘した。この考え方＝意味の使用説を、私たちの観点から読みかえると以下ようになる。文や語の意味がわかるということは、文や語が一定の意味を持って知覚的に現われるということであり、一定の意味を持って現われるということは、その文や語がこれ

これの状況（特定の状況）において使用されるものとして現われるということである。

私は、「ちょっと時間ある？」が意味を持って現われるということは、それが他人とまとまった話をしたい状況において使用される言葉として現われるということであると述べたが、この考え方はウィットゲンシュタインの考え方＝意味の使用説にもとづくものである。

言葉が意味を持って知覚的に現われるということはどのようなことか、という問題に対する私の一番目の答は、以上の通りである。言葉がこれこれの状況（特定の状況）において使用されるものとして現われている時、その言葉は一定の意味を持っていると言える。

ただし、言葉が意味を持って現われるということはどのようなことか、という問題には、また別の答もある。私は、先に「波動関数の収縮をもたらすのはデコヒーレンスである」という文を例として挙げ、これはおそらく理解されないだろうと述べた。ただ、この文を理解する人もいるだろう。そして、その人の前では、この文は一定の意味を持って現われていることになる。では、「波動関数の収縮をもたらすのはデコヒーレンスである」という文が意味を持って現われるということはどのようなことだろうか。

端的に言えば、この文が、i) 波動関数の収縮とは、電子や陽子といった極微の粒子の「重ね合わせ」の状態が観測されると壊れ、観測された点に存在しているという状態だけになってしまうことである、ii) 「重ね合わせ」とは、A点に存在しているという状態、B点に存在しているという状態等々、様々な状態が同時に共存しているということである、iii) デコヒーレンスとは、周囲の環境との相互作用によって「重ね合わせ」の状態が破壊されることである、iv) 観測は、相互作用を通して遂行されるので必然的にデコヒーレンスをもたらす、等々といった文、及びこれらの文に含まれる語から織り上げられたネットワークに連なるものとして現われるということである。そうしたネットワークの中に位置づけられるものとして現われるということである。さらに言うと、こうしたネットワーク内の文や語によってパラフレーズ可能な文、説明可能な文として現われるということである。

なお、先に例として挙げた「世間知らず」という言葉が一定の意味を持って現われるということ、こうした観点から説明することもできる。「世間知らず」という言葉が一定の意味を持って現われるということは、この言葉が例えば「世の中のルールや常識などを知らないこと」とか「年若い人間がよく知らない人にいきなり面倒な頼み事をする」といった文や語のネットワークに連なるものとして現われるということである。こうしたネットワーク内の文や語によってパラフレーズ可能な言葉、説明可能な言葉として現われるということである。

言葉が意味を持つということに関する以上のような考え方は、クワインの全体論的意味論にもとづいている。また、ウィットゲンシュタインも意味の使用説だけでなく全体論的意味論の考え方を提示している（Wittgenstein 1958 = 2010 : 17 ; Quine 1960 = 1984 : 120）。ただし、ここでは全体論的意味論について立ち入った説明を行う余裕はない。

最後にもう一点。`私一世界、一体説では、言葉が一定の意味を持って現われることを、その言葉がこれこれの状況（特定の状況）において使用されるものとして現われるということ、あるいはその言葉がその言葉を内に含む文や語のネットワークに連なるものとして現われるということであると私は述べた。ただ、言葉が一定の意味を持つにあたって、その言葉が使用される状況が思い浮かんだり、その言葉が連なっている文や語のネットワークが思い浮かんだりする必要はない。「世間知らず」という言葉を聞いたり、見たたりした時に、とりたてて「世間知らず」が使用される状況が思い浮かばなくても、「世の中のルールや常識などを知らないこと」



といった文が思い浮かばなくても、「世間知らず」は一定の意味を持つだろう。「世間知らず」が単なる物理音やインクの染みではなく「～として」の様相を持って（ハイデガーの言い方では、《として》の構造（Heidegger1927 = 1994 : 322-324）を持って）現われれば、それは一定の意味を持つのである。すなわち理解されるのである。

さて、以上において、「私－世界、一体説では、言葉が理解されるということに関して、どのように考えているのかを述べた。この考え方に対しては、当然反論が出るだろう。一番強力な反論は、次のようなものではないだろうか。「確かに、言葉そのものは、「頭の中」に入ってくることはないかもしれない。しかし、言葉を聞いたり、読んだりしている時には、様々な内言や像が、すなわち「思い」が生じていることは間違いない。そして、様々な「思い」が生じるということが、言葉が理解されるということではないのか。そうであるとするならば、言葉は「思い」が生じている場所で理解されていることになる。言葉はやはり「頭の中」（＝「思い」が生じている場所）で理解されているのではないか。」これも避けて通ることのできない反論である。続いて、この反論に応答することにした。

## 5. 「頭の中」に「思い」が生じることが理解することではない

「こいさん、頼むわ。――」

鏡の中で、廊下からうしろへはいつて来た妙子を見ると、自分で襟をぬりかけていた刷毛を渡して、そちらは見ずに、眼の前に映っている長襦袢姿の、抜き衣紋の顔を他人の顔のように見据えながら、

「雪子ちゃん下で何してる」

と、幸子はきいた。

谷崎潤一郎『細雪』（一九四六～四八年）の書き出しである。この文章を読んで、場合によっては、鏡台や刷毛や長襦袢の像が思い浮かんだり、市川崑が映画化した際に幸子や妙子を演じた女優の顔が思い浮かんだりするかもしれない。文章を読んでいて、様々な像や内言が思い浮かぶことは、ごくありふれたことである。そして、様々な像や内言、すなわち「思い」が生じることは、人間の読書経験の一部であるとみなすこともできる。

文学理論家のヴォルフガング・イーザーは、文学作品を読むという経験において、読者が様々なイメージを思い浮かべることによって、その文学作品を完成させていくのだと論じた。イーザーが言うイメージとは、「私－世界、一体説で言う像に該当するものである。イーザーによると、作家が書いた文章は、読者が作品を具現化していくにあたっての「下絵」にすぎない（Iser1976 = 1982 : 13）。作品は、読者による具現化によって、初めて完成する（Iser1976 = 1982 : 33-34）。そして、読者による具現化とは、作家が書いた文章を読み進めている読者が様々な像を思い浮かべていくことである。先の例で言えば、『細雪』の文章を読みながら、読者が鏡台や刷毛や長襦袢や女優の顔を思い浮かべることである。

人間の読書経験において、とりわけ文学作品を読むという経験において、「思い」が生じるということは、ある意味決定的である。「思い」が生じることによって、文学作品を読むという経験は豊かなものとなっている。そして、イーザーの理論によると、「思い」が生じることによって、文学作品は完成していくのである。

また、「思い」が生じるのは、言葉を読んだ時に限られるわけではない。言葉を聞いた時にも「思い」が生じることがある。例えば、昨日の音楽ライブを語る友人の言葉を聞きながら、エンディングの情景が思い浮かんだりするかもしれない。しかし、「思い」が生じるということが、言葉が理解されるということではない。「思い」が生じるのは確かである。しかし、「思い」が生じなくても、言葉は理解されるのではないか。「西洋医学は臓器の医学であり、東洋医学は全身の医学である」とか「お手紙ありがとうございます」といった言葉を読んだり、聞いた時、通常は何も思い浮かばないのではないだろうか。それでも、これらの言葉は理解されているはずである。「原子は原子核と電子から構成されている」という文は、別に理科の教科書に載っているような原子の図が思い浮かばなくても理解されるはずである。

言葉にふれた時に、何かが思い浮かぶことはある。しかし、言葉にふれた時に生じる「思い」に関して、それは理解の随伴現象であるという考え方がある。くわしい議論はここではできないが、私もこの考え方に同意する。言葉にふれた時に何らかの像や内言が思い浮かぶことがあるのは確かだとしても、それは理解の随伴物であり、「たかだか理解の徴候あるいはしるしに過ぎないのであって、理解そのものではない」(McGinn1984 = 1990 : 6) ののである。「思い」が生じることは、理解そのものではなく、理解の随伴現象である。だから、「思い」が生じなくても言葉は理解されるのである。

結論を出そう。ここで応答しようとした反論は、次のようなものであった。「言葉を聞いたり、読んだりしている時には、様々な「思い」が生じている。そして、様々な「思い」が生じるということが、言葉が理解されるということである。よって、言葉はやはり「頭の中」(=「思い」が生じている場所)で理解されているのである。」

この反論に対しては、次のように答えたい。言葉を聞いたり、読んだりしている時に、「頭の中」に様々な「思い」が生じることがあることは確かである。しかし、それは理解そのものではなく、理解の随伴現象である。また、語や文は、「思い」が生じなくても理解される。よって、言葉にふれた時に、「頭の中」に様々な「思い」が生じることがあるとしても、それは言葉の理解とは異なる次元の現象である。「頭の中」に様々な「思い」が生じることは、言葉の理解に随伴する現象であって、言葉の理解そのものではない。よって、言葉は「頭の中」で理解されているとは言えない。

## 6. 人間の理解とは基本的には世界の側の出来事

人間が理解するのは、何も言葉だけではない。人間は、例えば他人の気持ちや意向も理解する。そして、そうした理解も「頭の中」で行われるわけではない。知り合い二人とサッカーの話で盛り上がっている時、あなたが「今度、みんなでフットサルをやろう」と切り出したとすると、二人は、最初「いいね」と応じる。しかし、コートの予約や具体的な日時の話になると、とまどった表情を見せ、口数も少なくなる。そこで、あなたは、「でも、今年はもうコート取れないかな」と言って、事態を収拾する。あなたは、空気を読んだということになる。

空気を読むということは、他人と接している場において、他人の表情や振る舞いに見えかくれする気持ちや意向を理解して、その場にふさわしい行動を選択するということである。空気を読むには、明示的に表明されていない他人の気持ちや意向を理解することが必要である。そして、その理解も「頭の中」で行われているわけではない。

上記の例で言えば、知り合いの表情や振る舞いが、本当は行きたくないけど言い出しにくい時の表情として、あるいはあまり乗り気ではない時の振る舞いとして、知覚的に現われれば、それで知り合いの気持ちや意向は理解されたことになる。知り合いの表情や振る舞いが、以上のような意味を持って現われることにおいて、知り合いの気持ちや意向は理解されたことになる。「本当は行きたくないけど、言い出しにくい」とか「フットサル、そんなにやりたくないよ」といった他人の気持ちや意向が、「頭の中」で初めて察知されるわけではない。

言葉や他人の気持ち、意向は、「頭の中」で理解されているわけではない。それらの理解は、言葉や他人の表情、振る舞いの意味的な現われにおいて実現している。それらの理解は、世界の側の出来事である。もっと言ってしまえば、そもそも人間による理解とは、基本的に世界の側の出来事である。

テニスコートでラリーをしている時、ストレートに打ち返せば、相手がボールに追いつかないことが理解されている。頭上に飛んでくるボールは多分アウトになるから無理にスマッシュをしない方がいいことが理解されている。こうした理解は、「頭の中」で行われているわけではない。相手側のコートにおける相手の位置や頭上に飛んでくるボールの「見え」が、一定の意味——右のライン際のボールには追いつかない位置とかアウトになるボールといった意味——を持って知覚的に現われることにおいて、こうした理解は実現している。こうした理解は、「頭の中」の出来事ではなく、相手の位置やボールの「見え」が一定の意味を持って現われるという世界の側の出来事である。

街の中を歩いている時、コンビニの前でたむろしているのは、公園のそばの中学の生徒であることが理解されている。目の前から走ってくる自転車がこのままでいけば自分にぶつかってしまうということが、右によけなければ危険であるということが理解されている。これらの理解も同様である。これらの理解もたむろしている若者の外見や走ってくる自転車の「見え」が一定の意味を持って現われることにおいて実現している。それは、世界の側の出来事である。

言葉の表現には、「頭の中に入る」とか「入らない」といった表現がある。例えば、本を読んでいる時、その内容が理解されない時、本の内容が「頭の中に入っていない」といった言い方がされることがある。こういう言い方が日常的に使われていることもあって、人間の理解は「頭の中」で行われているという考え方が定着しているのかもしれない。しかし、何度も書いたように、人間の理解は「頭の中」で行われるのではなく、「私—世界、」の中の様々な物、事象、現象が一定の意味を持って現われるということにおいて実現している。

そして、「私—世界、」の中の様々な物、事象、現象が一定の意味を持って現われるということは、それらが「～として」の様相を持って現われるということである。例えば、他人のとまどう表情が、本当は断りたいけど言い出しにくい時の表情として現われるということである。「ちょっと時間ある？」という言葉が、他人とまとまった話をしたい状況で使用される言葉として現われるということである。

なお、「私—世界、」の中の様々な物、事象、現象が「～として」の様相を持って現われるということは、「私—世界、」の中心に位置する「私＝身体、」が「～として」の「～」の部分の思い浮かべることではない。「私＝身体、」としての人間が、別に「本当は断りたいんだけど言い出しにくいんだな」と思わなくても、「他人とまとまった話をしたい状況で使用される言葉だ」と思わなくても、他人のとまどった表情は、本当は断りたいんだけど言い出しにくい時の表情として現われるだろうし、「ちょっと時間ある？」という言葉は、他人とまとまった



話をしたい状況で使用される言葉として現われるだろう。

誤解されるかもしれないが、「～として」の様相は、物や事象や現象の知覚的な現われそれ自体の中にあると言える。見えはしないし、聞こえもしないが、知覚的な現われそれ自体の中にあるのである。「～として」の様相は、いわば物や事象や現象の知覚的な現われそれ自体の中に、透明な形で、あるいは潜勢的な形であるのである<sup>(3)</sup>。「本当は断りたいんだけど言い出しにくい時の表情として」という様相は、透明な形で他人の表情の知覚的な現われそれ自体の中にあるのである。「他人とまとまった話をしたい状況で使用される言葉として」という様相は、透明な形で「ちょっと時間ある？」という言葉の知覚的な現われそれ自体の中にあるのである。

さて、ここまでの話で、人間（“私—世界、の中心に位置する“私＝身体、としての人間）が、“私—世界、の中の様々な物や事象や現象を理解するということは、それらが一定の意味を持って現われるということであり、それらが一定の意味を持って現われるということは、それらが「～として」の様相を持って現われるということであることを確認した。ここで、もう一つ大事なことを確認しておこう。“私—世界、の中の物や事象や現象が意味を持って知覚的に現われることは、“私—世界、の中心に位置する“私＝身体、の脳神経系が活動していることと一体である。“私—世界、の中の物、事象、現象が「～として」の様相を持って現われるということは、“私＝身体、の脳神経系が活動していることと一体なのである。非人称のモノの世界が“私—世界、という通常の物の世界に次々と“転現、していく時に、“私—世界、の中の物、事象、現象の意味的な現われは、“私—世界、の中心に位置する“私＝身体、の脳の神経細胞集団がある一定の発火活動を行っていることと一体となっている。そのような一体性が存在する形で、非人称のモノの世界は、“私—世界、という物の世界に“転現、しているのである。

“私＝身体、としての人間の目の前で他人が見せる表情の意味も他人が発する言葉の意味も、“私＝身体、としての人間の脳の神経細胞集団がある一定の発火活動を行っていることと一体である。また、他人の表情が一定の意味を持つことや他人が発した言葉が一定の意味を持つことが、他人の気持ちや意向が理解されることであり、他人の言葉が理解されることであることをかんがみれば、他人の気持ちや意向の理解、他人の言葉の理解は、“私＝身体、としての人間の脳の神経細胞集団がある一定の発火活動を行っていることと一体であると言えよう。そして、一体であるから、脳の神経細胞集団が活動を止めてしまえば、他人の気持ちや意向の理解、他人の言葉の理解、ひいてはあらゆる理解は不可能になるだろう。脳に損傷を受けることによって日常生活用品の意味が失われてしまったというような症例（山鳥 2002：98）がそうしたことを強く示唆している。

しかしながら、さらにここでもう一つ言っておかなければならないのは、人間のあらゆる理解は、脳の神経細胞集団の発火活動と一体であり、それが実現するには神経細胞集団の発火活動が不可欠ではあるが、神経細胞集団の活動それ自体は理解の活動ではないということである。脳の神経細胞集団は、物理化学や電子工学の法則に則った電気的活動、物理化学的活動を行っているだけである。それは、理解する活動でも、意味を生み出す活動でもない。もし、脳の神経細胞集団の発火活動それ自体が理解の活動であるということになれば、人間の理解は脳という「頭の中」で行われていることになる。しかし、残念ながらそうではない。物の世界の中の物、事象、現象についての人間の理解は、基本的には、それらが一定の意味を持って現われることにおいて、実現しているのである。

なお、最後につけ加えれば、人間の理解が「頭の中」で行われることもないわけではない。

それは、次のようなケースである。今日の朝からなぜか左肩が痛い。このようなことは、初めてである。「なぜだろう。」あれこれ考える。しばらくして、「ああ、あれか」と気づく。昨日、スーパーに買い物に行った時、買った物が多すぎて、自転車のかごに入らず、左手に長時間ぶら下げて帰ってきたのだった。この場合、内言が生じる場所において、痛みの理由が理解されたと言えるだろう。

内言をはじめとする様々な“思い”が次々と浮かんでくる過程において、すなわち日常的な考え事の過程において、これまでわからなかったことが突然わかるようになることがある。内言をはじめとして“思い”が次々と生じる場所を「頭の中」と呼ぶとするならば、以上の出来事を「頭の中」で理解が行われたケースとみなすことができるだろう。ただし、「頭の中」とは言っても、あくまで脳の中ではないのであるが。

### 〔付記〕

ここで、本稿の内容を包摂するより大きな枠組みについて述べておきたい。現在、人間観として、人々の間で広く定着しているのは、心身二元論と脳中心主義の人間機械論であろう。ただ、様々な論者が指摘してきたように、この二つの人間観には数々の問題点がある。人間が感じたり、知覚したり、理解したり、考えたり、行動したりすることはどのようなことなのかを説明するにあたって、現在、心身二元論及び脳中心主義の人間機械論とは異なる人間観の枠組みが求められていると言えよう。そして、そうした人間観の枠組みを作り上げる作業を私は続けてきた。最終的に出来上がったのは、“私－世界、一体説という人間観（そして世界観）の枠組みである。“私－世界、一体説を体系的に披瀝した原稿（四〇〇字詰め換算で八三〇枚）は「心も脳も人の主ではないよ——“私－世界、一体説が人間観を更新する」というタイトルで、すでに完成済みである。本稿の内容は、知覚、感情、理解、思考、意味、言葉、行動、他人との関係などを包括的に論じたこの原稿の一環をなすものである。

なお、本稿では、“私－世界”、“私＝身体”、非人称のモノの世界、“転現”、“思い”、そして一体といった用語が使用されているが、これらは、“私－世界、一体説の用語である。本稿の内容をより十全に伝えるには、これらの用語及び“私－世界、一体説の基本的な考え方を説明する必要があるだろう。ただ、本稿の内容の概要は、このままでも伝わると判断したので、それらの説明は今回は行わなかった。

### 〔註〕

(1) ところで、内言が生じる場所とはどこだろうか。私の場合は、鼻の後ろの方である。こう言うと、大体の人は苦笑する。何か変なことを言っていると思われるらしい。ちなみに、私の「鼻の後ろ」発言を聞いた医学部の一年生が、自分の友人たちに内言はどこに生じているのかを聞いて回ったことがある。目の後ろ辺りという答が多かったそうである。そして、鼻の後ろの方と答えた友人も何人かいたらしい。なお、内言に関する私の理解に関しては、村上1998を参照されたい。

(2) ただし、空気の振動の様態は、浜口稔も指摘したように、それほど正確に脳に伝えられるわけではない。なぜなら、発話によって空気の振動が生じる空間は、「おびたしい雑音であふれかえっている」（浜口1990：134）からである。通常発話による空気の振動が生じるのは、「ノイズがあふれかえる劣悪な環境」（浜口1990：137）の中であり、その振動は「音響のカオスをかいくぐって」（浜口1990：139）鼓膜に到達するしかない。また、鼓膜に到達した空気の振動は、次々と異なる媒質によって伝達されていく（浜口1990：137）。耳小骨→前底窓→リンパ液→基底膜の上の有毛細胞→電気パルスといったように。発話によって生じた空気の振動の当初の様態は、それほど正確には脳に伝え

られていないだろう。

(3)「透明」という言い方は、黒崎宏から借用したものである。ここでは詳述できないが、黒崎は、語や文の意味は、「体験に対して透明」であると言う（黒崎 1991：v,111-113）。なお、黒崎の所論と我々の所論との異同に関しては、別の機会に論じたい。

## 〔文献リスト〕

- de la Mettrie, J.O. 1747 *L'Homme machine*. = 1932 杉捷夫訳『人間機械論』岩波書店
- 浜口 稔 1990 「言語機械〈ヒト〉という神話」『imago』11月号
- Heidegger, M. 1927 *Sein und Zeit*, Max Niemeyer. = 1994 細谷貞雄訳『存在と時間 上』筑摩書房
- Iser, W. 1976 *Der Akt des Lesens*, Wilhelm Fink. = 1982 轡田収訳『行為としての読書』岩波書店
- 黒崎 宏 1991 『「語り得ぬもの」に向かって』勁草書房
- McGinn, C. 1984 *Wittgenstein on Meaning*, Basil Blackwell. = 1990 植木哲也・塚原典央・野矢茂樹訳『ウィトゲンシュタインの言語論』勁草書房
- 村上直樹 1998 「内言の自己意識と〈私〉」日本記号学会編『聲・響き・記号（記号学研究18）』東海大学出版会
- 中込照明 2000 「ライブニッツと現代物理学」『数理科学』38（10）：21-28
- Quine, W.V.O. 1960 *Word and Object*, MIT Press. = 1984 大出晃・宮館恵訳『ことばと対象』勁草書房
- Saussure, F. de 1971 *Cours de linguistique générale*, Payot.
- Wittgenstein, L. 1934 *Philosophische Grammatik*. = 1975 山本信訳『ウィトゲンシュタイン全集3 哲学的文法1』大修館書店
- Wittgenstein, L. 1958 *The Blue and Brown Books*, Basil Blackwell. = 2010 大森荘蔵訳『青色本』筑摩書房
- 山鳥 重 2002 『記憶の神経心理学』医学書院
- 山本健一 1996 『脳とこころ』講談社